アンドレ・マルロー綜合年譜（I）

堀　田　郷　弘

はじめに

1964年（昭和39）に拙編「アンドレ・マルローの書誌目の試み」（南山大学『アカデミア』第43輯）を発表した。これは第一部「マルロー著作目録」，第二部「マルロー研究文献目録」から成り，いずれもマルロー存命中の1960年までに発表された文献を，出来うるかぎり所在を確認した上，編年体で整理，収録したもので，いわば文字通り“書誌目の試み”であった。しかしその際，序文にも記したが，これはマルローの biographie と bibliographie あるいは La vie と L'œuvre を総合したもの，つまりマルロー綜合年譜ともいうべき構想の一部を成すものとして編れたものであった。

今回は，上記の「マルロー書誌目の試み」を含めて，最初の構想である Bio-Bibliographie, 綜合年譜として編もうとするものである。

一般に年譜あるいは bio-bibliographie に求められる意義は，作家の外観的全貌を，一定の方法に従って編れた諸事項によって提示することにあろう。作家の生涯における諸事項の，あるいは資料の位置づけという諸研究に対する基礎的な資料提示の意義がそこに認められよう。しかし，そうした基礎的な，補助的な意義以上に，方法によっては，年譜それ自体の自律的意義を与えうるのではなかろうか。それは，作家の生涯と，それらの各行為をとりまき，それらに反応し，あるいはそれらが反応させられた歴史的諸事項を総合的に選択，対照させることによって，一作家の作品と生活に内在する秘儀的な相関性を，つまりその作家の一種の統合像を啓示できるのではないか，ということである。

作家における“生活”とは，作家の生涯の単なる事項リストではなく，作家が創られ，作家が創り出したと思われる社会的，歴史的事件と対応するものであり，また“作品”とは，彼自身の作品ばかりではなく，その作品に反応した全ての著作に対応させるものである。

こうした歴史の中の一作家の“生活と作品”の相関性は，現代フランス作家一般に共通して，緊密さを増しているが，マルローにあっては“参加作家”，“行動文学者”，“二十世紀の証人”と名づけられて来たように，他に増して緊密さを示しているように思われる。マルローのような作家にあっては，この二つのものの間に横たわる神秘的な関連性にこそ，その芸術創造の秘密，換言すればマルロー文学の本性を明らかにしてくれる鍵が秘められているように思われる。

マルロー自身は，自分の生活や通時的な作品解説を，その主義として全くしていない。しかし一面ではその著作の諸データーが全て彼の現実の諸事項に呼応するものと考えられるし——『La Voie royale, 王道』と1923年のインドシナ旅行，『L'Espoir, 希望』と1936～39年のスペイン内乱参加，『Les Noyers de l'Altenburg, アルテンブルグのくるみの木』と第二次大戦の戦車隊参戦，など——，また晩年，相対的な意味では明らかにいわゆる自伝ともいうべき一連の著作『Le Miroir des limbes』——『Antimémoires』(1967)，『Les Chênes qu'on abat……, 倒された樫の木』(1971)，『La Tête d'obsidienne』(1974)，『Lazare』(1974)，『Hôtes de passage』(1975) など——を発表している。しかし，彼自身は次のように書いている。

「本書の中に見いだされるであろう人間とは，死が世界の意義について問う質疑のかずかずと共鳴する人間である」(『Antimémoires』1970年改訂版，p. 18)。

死を問いつづけ生きて来たマルローにとって“反回想録”の中に描かれる自画像とは，このように質疑によって変貌されられたものであり，したがってその生涯も，“意義の歴史”とも言うべきものである。

こうしたマルロー自身の態度にもかかわらず，すでに生存中から伝説におおわれはじめていた彼の小説時代 (1920～40年代) を中心とする生活の事実を探索し，その創作との神秘的な関係を明らかにしようとする研究——A. Vandegans『La Jeunesse littéraire d'André Malraux』(1964)；W. G. Langlois『André Malraux, l'aventure indochinoise』(1967)；W. G. Langlois「Aux sources de *L'Espoir*：Malraux et le début de la guerre civile en Espagne」(1973) など——，あるいは冒険家，革命家，芸術論者，文化大臣と変貌を重ねたマルローの生涯の秘密を明らかにしようとする研究や証言——Clara Malraux『Le Bruit de nos pas』I～IV. (1963～1973)；J. Lacourture『André Malraux, une vie dans le siècle』(1973)；R. Payne『André Malraux-A Portrait of André Malraux』(1973)；A. Chanson『La Reconquête, 1944-1945』(1975)；Claude Mauriac『Et Comme l'espérance est violente』(1976)；S. Chantal『Le Cœur battant』(1976)；その他マルロー研究誌「André Malraux」I～III, など——が最近多く発表されている。日本でも村松剛『評伝アンドレ・マルロオ』，横塚光雄『アンドレ・マルロオ』が出版されているが，マルローが亡ったこれからはさらにこうした分野の研究や証言が発表されることになろう。

今回の綜合年譜は，これらの著作に認められる態度に呼応して，そしてまたマルロー自身の理

念にも沿うように，単なる記号的な事実の羅列である chronique ではなく，諸事実間の有機的な対照が語るマルローの“意義の歴史” histoire des significations を啓示するものにしたいと願うものである。

この総合年譜の全体的な構成は，次の三項によって成るものとする。

1. マルローの生活とその生活に関連のある社会的事件の項。
2. マルローの著作
3. マルロー研究文献

最初の邦訳が出版され日本との関係が具体的になる1930年以降は，日本におけるマルローの項が加えられる。

またそれら三項の諸事実については，事実の名称にとどまらず，出来るかぎり詳細な解説を註（脚註および補註）として加えたいと思う。

本稿を「マルロー綜合年譜」の（I）としたのは，枚数の都合上，年代を1920年まで，つまり最初の著作が発表された年までと限定したからである。

年　　譜

1919年までは左欄がマルローの，右欄が関連する歴史的事項である。1920年以降は左欄がマルローの生とその歴史的事項で，右欄がマルローの著作とマルローについての文献となる。著作欄においてはマルロー著（ないし共著）の単行本は全て太字イタリックで，誌紙に発表の著作は普通のイタリックで示した。その他全体を通じて単行本は『　』，誌紙は「　」で示し，（　）内は単行本の場合出版社名，誌紙発表の著作の場合，誌紙名，発行月日を記した。表中の①②…は脚註，(1)(2)…は文末の補註を示す。註の文末の（　）は出典を示し，序文中に記された文献については著者名のみ掲げた。→邦は邦訳があることを示す。

1901（明治34年）

11月3日，ジョルジュ=アンドレ・マルロー Georges=André Malraux，パリ18区ダムレモン街73番地に，父フェルナン=ジョルジュ①，母ベルト・ラミ②の唯一の子として生まれる。マルロー家は16世紀以来フランスのフランドル地方に定住し(1)，代々海運業を営み，産をきづいたといわれる。

1900　ニイチェ没(2).
1901　ノーベル賞制定.
1902　フランス社会党結成.
　　ゾラ没.
1904　英仏協商.
　　日露戦争（～05）.

① 「第一次大戦に志願してマルヌ会戦に参加した」（『王道』）。「美男で，生活を楽しみ，たくましく，立派な口髭をはやし，モーパッサンの人物のようだった」（Lacourture）。

② ジュラ地方の農家の娘で，「大きくて，やせて，かなり美人で，容姿や動作が若々しく，娘のような声をしていた」（Clara）。

祖々父ルイは漁船団を組織し働くうち海で亡った。祖父アルフォンス=エミール①は，海運業を営むと共にダンケルク市長もつとめたが，後事業に失敗した。長男であった父はパリに出て金融，株式関係の実業家として再び家運を盛り上げ，アンドレが生まれる頃はかなり富裕であった。

1905

両親離婚②。パリ東部ボンディのガール街16番地で食料品店を経営する母方の祖母③の家に母と共に住む。

1906

ボンディのサン=ドゥニ街にあった小学校④に入学，ルイ・シュヴァソンと親交⑤。国語，歴史，科学に優れる。

1909

11月20日，祖父の死，68歳。自殺とも事故死ともいわれる。

1914

大戦勃発。父は戦車隊少尉で志願(4)。先生も徴兵され，一種の“大休暇”。読書⑥，観劇，映画などに旺盛な興味を示す。

1905　露，血の日曜日．孫文の中国革命同盟結成．サルトル生まれる．

1906　ドレフュス無罪．

1908　青年トルコ党革命(3)．キュビスム運動．
1909　N. R. F. 創刊．
1910　トルストイ没．
1911　第2次モロッコ事件．伊・トルコ戦争．辛亥革命．
1912　バルカン戦争．
1913　プルースト『失われた時を求めて』の第1巻．カミュ生まれる．アポリネール『キュビスムの画家たち』．
1914　第一次大戦勃発（～18）．ジョレス暗殺される．

---

① (1842～1909)。「この祖父は私の祖父である。船主であった『王道』の主人公の祖父は似せたものである」(『反回想録』)；「祖父はその祖先がもはや伝説の彼方に消え去った海賊であること，また祖父の祖父が沖仲仕であったことを誇りにしている」，「祖父の持ち船のほとんどがニューファウンドランド沖で遭難して保険会社が保険金の支払いを拒んだ時事業から手をひいた」，「76歳の時事故で死んだ老ヴァイキングの祖父」(『王道』)；『アルテンブルグのくるみの木』で描かれたアルザス地方の架空の町ライヒバッハの老町長のイメージ。

② 1900年に結婚。後年父が再婚し，異母弟ローラン，クロードをえる。「マルローはほとんど毎週のようにパリで父に会っていた。時には母もいっしょだった」(シュヴアソン談：Lacourture)。

③ 祖母アドリエンヌ・ロマニアは「フランツ・ハルスが描いた摂政王妃のように大柄で堂々とした婦人だった」(Clara)。

④ 先生2人と生徒18人の小さな私立小学校。

⑤ 後に作家となる。インドシナの遺跡発掘に同行したり，大臣の折も側近となったり，友情は生涯続いた。

⑥ 「読書が当時最も興味をひいたものだった」。出入したボンディの図書館で読んだと思われるものは「デュマ，フロベール，ユゴー，バルザック，シェクスピア(『マクベス』と『ジュリアス・シーザー』のみ)など。」(Lacourture)。

1915

パリ，チュルビゴ街の上級小学校（エコール・プリメール・スペリュール）に入学（大戦末にチュルゴ高等中学校（リセ）になる），ブランダン（後に作家），キュザン（後に俳優），パリス（後に作曲家）と親交。歴史，デッサンに優れる。この頃東洋美術に興味をよせる，とりわけ日本の陶磁器の美しさを知る①。

1917

勉学に嫌気さす。ポーレット・トゥヴナン嬢の私塾に通う②。

1918

コンドルセ高等中学校への転校試験に失敗，大学進学をあきらめる。

1919

正規の勉学を放棄し，パリに出て独立，ラシェル街の下宿に移る。ついでラスパイユ通りのオテル・リュテチア，さらにブリュネル街の男子下宿に住む。パリ大学付属東洋語学校で聴講したり[6]，ギュメ東洋美術館に通うなど，東洋古美術に熱中。一方生活の糧をうるため，ギャルリー・ド・ラ・マドレーヌ街の古書店兼稀覯本出版ルネ=ルイ・ドワイヨン書店で稀覯本発掘の仕事をはじめる③。

この頃より文学青年的交遊を始める。モーリャックの知己をえる。初めてマルクスの著作を読む④。

1915　アインシュタイン「相対性原理」．ガンジー帰国．21カ条要求．ロマン・ロランのノーベル賞受賞．

1916　ダダイスム起こる．バルビュス『砲火』．ヴェルダン会戦．

1917　ロシヤ十月革命[5]．孫文の広東軍政府．シュペングラー『西欧の没落』．ジャコブ『骰子筒』．

1918　休戦．独革命．アポリネール没．ツァラ『ダダ宣言』．

1919　ヴェルサイユ講和条約．コミンテルン結成，第三インター発足（～48）．伊ファシスト党成立．独ワイマール憲法．中国の「五四運動」始まる．ジィド『田園交響楽』．バルビュス『クラルテ』と「クラルテ」運動．リヴィエール主幹「N. R. F.」復刊．ドルジュレス『木の十字架』．

---

① 「子供の頃両親の知人でイエナ広場の近くに住む人があったのでよくギュメ美術館につれて行かれた。日本の陶磁器はおよそ洗錬の極みに見えた」（『黒耀石の頭像』）。

② トゥヴナン先生のマルロー印象，「すでに自己を統御している子で，人の長となるセンスをもっていました。性格は野生的でした」（Rayne）。

③ 「1919年のことだった。ひとりの背の高い，金髪の青年が訪ねて来た。身なりは質素だったがきちんとしていた。稀覯本や初版本の発掘の仕事がしたいというのだった。そしてその後少くとも2年間，私たち双方が満足いくように，その仕事を，正確に賢明に遂行してくれた。その青年がアンドレ・マルローだった」（R.-L. Doyon『Mémoire d'homme』1953）。「毎朝11時になると，彼は前日の収穫を抱えてやってきた。そして私に，その収穫の価値を語り，いかに重要かを弁じた」（「Les Libertés du Mandrin」1962）。

④ 「マルクスを読んだ時私は18歳頃だった。しかし私が読んだのは翻訳されたもので図書館でみつかるものだった。つまり全作品というにはほど遠いものだった。翻訳されていたのは，勿論『資本論』があり『エンゲルスとの書簡』，『宣言』や『十二月二日』といったテキストだった。多くのものがまだ翻訳されず，私が最初に読んだ未翻訳のマルクスの知られた本は『聖家族』だったことを憶えている」（J. Vilar との対談，1971）。

1920

ドワイヨン書店の仕事続ける。1月創刊の「ラ・コネサンス」誌① (1920. 1〜1922. 11) の編集や稀覯本出版の仕事。J. Laforgue『Chroniques Parisiennes』2巻, A.-C. Emmerich『La Passion de Jésus-Christ』, Görres『La Mystique divine, naturelle et diabolique』の出版を企画。

シモン・クラ書店に移り，少部豪華版の〈サジテール叢書〉出版企画を担当，L. Tailhade『Carnet intime』, Baudelaire『Causeries』, G. Gabory『Cœurs à prendre』R. de Gourmont『Le Livret de l'Ymagier』, M. Jacob『Jouets du vent』など出版。

この頃より文筆活動を始める。編集担当の「ラ・コネサンス」や，ジャコブやM.アルランの紹介による「アクション」誌⑨などに文芸評論や散文詩を発表。

編集や文筆活動を通じて，作家ジャコブ，サルモン，アルラン，パスカル・ピア，また

1月　国際連盟成立

1月 *Des Origines de la poésie cubiste*②
(「La Connaissance」1, p. 38-43)

2月 *Trois livres de Laurent* TAILHADE③
(「La Connaissance」2, p. 196-7).

4月 *La Genèse des Chants de Maldoror*④
(「Action」3, p. 33-35)→邦訳

7月 *Mobilités*⑤ (「Action」4, p. 13-14)

7-8月・P. E. : Critique sur un conte fantastique de jeune Malraux. (「Littérature」15, p. 24)

10月 *Prologue*⑥ (「Action」5, p. 18-20)

*André Salmon : La Négresse du Sacré-Cœur*⑦ (「Action」5, p. 69-70)

*Les champs magnétiques par André Breton et Philippe Soupault*⑧ (「Action」5, p. 69)

12月　フランス共産党成立．独ナチス党．

---

① 1920年1月〜1922年11月のドワイヨン書店刊行の前衛文芸および思想月刊誌。編集責任者 René-Louis Doyon と Edouard Willermoz.

② 評論「立体派詩の起源について」. アポリネールに始まるジャコブやサルモンらの立体派の詩を P. Reverdy や F. Motorel の作品を引用しつつ論評。

③ 書評「ローラン・タイヤードの三冊の本」. 『Petit Bréviaire de la Gourmandise』; 『La Douleur』suivi de『Le Vrai Mystère de la Passion』; 『Lettres Familières』の四つの作品をとりあげて Tailhade を論評。

④ 評論「マルドロールの歌の生成」。ロートレアモンの『マルドロールの歌』の論評。

⑤ 散文詩「可動なものたち」。

⑥ 散文詩「プロローグ」。後の『Lunes en papier』の冒頭部の初稿の一部。

⑦ 書評。「アンドレ・サルモン著『サクレ=クールの黒人女』」(散文詩)。〈Ouvrages reçus〉欄の一文で署名は A. M.

⑧ 書評「アンドレ・ブルトン，フィリップ・スポー共著『磁場』」。署名は A. M。

⑨ "Cahier individualiste de philosophie et d'art" と性格づけられる前衛誌で，編集長は Florent Fels と Marcel Sauvage. 発行所はパリの 18, rue Feydeau.

ユダヤ画商カーンワイラーやその画家たちホアン・グリス，ガラニ，ブラック，レジェらを知る[7]。富裕なユダヤ人文学少女クララ・ゴールドシュミットと知り合う。

ダダの集会にも出入。

補註

1) J. Flanner (『Men and Monuments』1957) によれば Malraux という姓は Mauvaise Charrue (悪い犁) という仇名が変形したものという。マルローの祖父の代までフランス語ではなくフラマン語を用いていたと言われる。

2) 『アルテンブルグのくるみの木』や『反回想録』でニイチェが大きくとりあげられているが，ニイチェとマルローの思想的親近性については，マルロー自身「私が16歳のころ，われわれだれにとってもニイチェの思想は最も重要なものでした」(「J. Vilar との対談」) と言っているし，また B. Douthat「Nietzschean Motifs in *Temptation of the Occident*」(1957) や N. Hewitt「Malraux et Nietzsche : un rapport qu' il faut nuancer」(1975) をはじめとして幾多の研究がなされている。

3) 『アルテンブルグのくるみの木』の話者の父はアラビアのロレンスをモデルにし，このファタチュルクの革命を背景として描かれている。

4) 『王道』の主人公の父のイメージに使った事実では，マルヌ会戦で戦死と書かれているが，事実は生還している。

5) 「十月革命は技術的にみれば今世紀最初の革命ではなく19世紀最後のものである……戦車のない革命です。これは象徴的なことで，二つの革命（十月革命とパリ・コミューヌ）は銃で行われています」(J. Vilar との対談)

6) 東洋語学校生となりサンスクリットを学んだと記述する文献もあるが，正式の登録の記録はない。サンスクリットの知識も不明。

7) Max Jacob (1876—1944. 3. 5) 立体派の形成に大きな影響を与えたユダヤ人詩人；André Salmon (1881—) パリ生れで，キュビスム運動に参加した詩人，美術評論家；Marcel Arland (1899—)，この頃はダダに傾倒していた小説家，批評家；Pascal Pia，文筆家で，当時マルローと共に国立図書館に通い，稀覯本発掘をした；D.-H. Kahnweiler (1884—) 独生れの，ユダヤ系仏人で，ピカソをはじめ現代画家育成に大いに貢献した。マルローはクララを通じて，彼から大きな庇護をうける；Juan Gris (1887—1927)，スペイン人で立体派画家；Demetrus-Emmanuel Galanis，1882年アテネに生まれ，1900年以来フランスに移る。画家，版画家。マルローの最初の美術批評は，この画家についての一文である；Georges Braque (1882—1963)，マルローが“対象模倣の絵画の破壊者”として高く評価し，その死に際して弔辞を捧げた立体派の画家。；Fernand Léger (1881—1955)，当時立体派に属し，1921年にはマルローの著書の挿絵をしている画家。

(1977. 1. 21)